COVID-19 患者のケアと看護師の心情

４階西病棟　感染チーム　〇井上真紀子　藤川裕比　三笘彩花
安達彩華　藤井萌衣　笠原俊一

【目的】

2019 年 12 月、中国で COVID-19 感染症の発生が報告され社会情勢に大きな影響を与えるとともに、医療においても危機的な状況をもたらした。朝倉医師会病院でも COVID-19 患者を受け入れる事となり、多くのスタッフが未知のウイルスに直面する恐れや日々変化する医療情報への不安、何より感染防止の観点から制限せざるを得ないケアがある事に無力感と葛藤を抱えていた。一方でこれらを乗り越える為、様々な工夫やこれまでにはなかった柔軟な対応、病棟を超えた連携など最善の看護を目指した介入を実施した。

今回、これまでの COVID-19 に対する病棟での状況・対応について、事例をもとに振り返り、限られた環境の中でできる看護について考えた。

【方法】

対象：2020 年 4 月から 2021 年 3 月までの入院患者 192 名
COVID-19 発生・新型コロナウイルス感染症病棟設立から第 6 波までの当病棟の
COVID-19 患者の特徴・変化に合わせた対応と患者事例報告

【結果】

設立当初、COVID-19 は未知のものであった為、患者の不安は強く、隔離による活動制限が強いられ療養上のストレスは大きかった。また感染病棟における物品の取り扱いやケアの方法も整っておらず看護師は自分自身の感染に対する不安やケアの限界を感じていた。感染の観点から患者との接触は短時間でと指導されていたが、充分なケアができるよう感染管理認定看護師と相談しケア方法を見直し実施した。また日々のショートカンファレンスや申し送りで患者状況を報告しスタッフ間で個々に合わせたケアの方法を共有した。感染対策を徹底し病棟内感染が起きていない事から感染対策に対する自信へと繋がった。患者ケアの時間が増え患者と関わる機会が確保できた事で不安な思いに寄り添うことが出来た。また高齢者は活動量低下に伴う筋力低下や認知症患者の症状の進行やせん妄が認められるケースもあった。すぐに訪室できない状況であり転倒リスクが高いと予測される患者にはスタッフ全体でアセスメントし離床センサーの設置や環境調整を行い転倒予防に努めた。

COVID-19 患者の急変時や看取りの際、家族はガラス越しでの面会となっていたが、長期化する対応の中で家族に PPE の着脱方法を指導し直接面会ができるようにまで変化した。

【考察】

感染管理認定看護師の指導の下、PPE の着脱の徹底、手指衛生、ゾーニングなどの感染予防対応により病棟内感染が発生していない。その実績から自分たちの日々の活動に自信を持つことができ、今後の理学療法士の介入にも繋げることができた。

COVID-19 感染症の終息まで先が見えないため、今後も感染対策を徹底し家族を含めた COVID-19 患者への柔軟な対応を継続していく事が重要である。